

第 22 回「整形・災害外科 優秀論文賞」のお知らせ

本誌編集委員会では、昨年一年間の本誌に掲載された投稿論文（論究・臨床・手術・経験・症例欄等掲載論文）を対象に優秀論文の選考を行ってまいりましたが、この度、下記の論文が小誌における 2017 年（整形・災害外科 第 60 巻）の優秀論文に決定いたしました。

**サルコペニアのスクリーニングを目的とした
大腰筋横断面積計測の試み**

岩村真樹ほか（藍野大学保健医療学部，理学療法学科）
〔整・災外 60：1035—1040，2017〕（8 号）

**腰椎神経根障害に対する選択的神経根ブロック後の
経時的・定量的疼痛評価**

浅利 享ほか（青森労災病院，整形外科）
〔整・災外 60：1417—1420，2017〕（11 号）

選 者 評

2017 年第 60 巻に掲載された投稿論文から、本誌編集主幹 5 名の投票により、優秀論文として上記の 2 編が選ばれました。

岩村真樹氏の論文は、腹部 CT における大腰筋面積がサルコペニアのスクリーニングとして有用かを検討した研究です。平均年齢 75 歳の高齢女性 80 名の集団で、大腰筋面積と DXA による全身筋肉量の相関を検討したところ、その相関係数は 0.45 と有意ではあるものの、高い相関ではありませんでした。その結果、必ずしも大腰筋面積が全身の筋肉量を示すとは言えないと結論づけられています。

浅利享氏の論文は、腰椎疾患 82 例において、選択的腰椎神経根ブロック後の疼痛緩和を定量化した研究です。手術的加療に移行した群では、神経根ブロック後の 2 日目にはブロック前と同等の疼痛に戻っているのに対し、保存的に加療しえた群ではブロック後 7 日間にわたって効果が認められており、ブロック後の定量的疼痛評価の有用性が明らかとなりました。

いずれの論文も臨床に即した素晴らしい内容で、優秀論文にふさわしいものと評価されました。

受賞のこぼ

この度は優秀論文賞に選出していただき、大変光栄に存じます。

サルコペニアは当初、骨格筋量低下のみに焦点が当てられておりましたが、骨格筋量のみでは日常生活機能低下を捉える因子として弱いとされ、2010年にEuropean Working Group on Sarcopenia in Older Peopleにより、骨格筋量の低下に併せて筋力、あるいは身体機能の低下を有する場合にサルコペニアと判定するという定義が提唱されました。私は骨格筋量が日常生活機能低下との関連が低い要因として、BIAやDXAなど推定式で算出された骨格筋量を用いたことが一因にあるのではないかと考えました。そこで、CTにて身体機能と密接に関連し、早期より萎縮が生じるとされている大腰筋を測定することで、サルコペニアをより早期になおかつ身体機能と関連した因子として判定しうるのではないかと考え、本研究に至りました。

本研究は横田先生、佐浦先生をはじめ様々な先生方の御尽力の上で1つの形にすることができました。心より感謝申し上げます。

岩村真樹（藍野大学医療保健学部理学療法学科）



この度は歴史ある『整形・災害外科』の第22回優秀論文賞に選出していただき、光栄に存じます。

腰椎神経根障害に対する選択的神経根ブロック（SRB）の有効性は腰部脊柱管狭窄症や腰椎椎間板ヘルニアのガイドラインにも掲載されており、診断および治療に広く行われております。しかし、このSRBのエビデンスはあまり多くなく、個人の経験や裁量に大きく委ねられている現実があると思います。具体的には施行後の疼痛評価の方法や時期、使用薬剤量、施行回数、穿刺手技などが挙げられます。本研究の内容はSRB施行後の疼痛の変化を患者さん自身に経時的に記載していただき、その推移を検討したものです。本研究の内容が、読者の皆様の日常診療の一助になれば幸いです。今後更に症例数を重ねて詳細に検討を進めたいと考えております。

最後になりましたが、本研究に際し、その発想から論文作成までご指導をいただきました油川修一先生に深謝致します。

浅利 享（弘前大学大学院医学研究科整形外科学講座）



優秀論文の筆頭執筆者には、賞状ならびに副賞として金一封・記念品を贈呈いたします。

本誌編集委員会では今後も継続的に各年毎の掲載投稿論文を対象に「整形・災害外科 優秀論文賞」の選考を行ってまいります。読者皆様の活発な研究発表の場として、小誌を存分にご活用ください。

（整形・災害外科 編集室）